

## 甲良町に見るまちづくり

松本大学総合経営学部 3年 行政コース  
白戸ゼミ 一色 智成

滋賀県の甲良町は、行政と住民とのパートナーシップによるまちづくりを語る上で、非常に興味深い事例である。

ここでは、梓乃森祭での発表を元にして、甲良町に見られた特徴を、次の編成で紹介する。

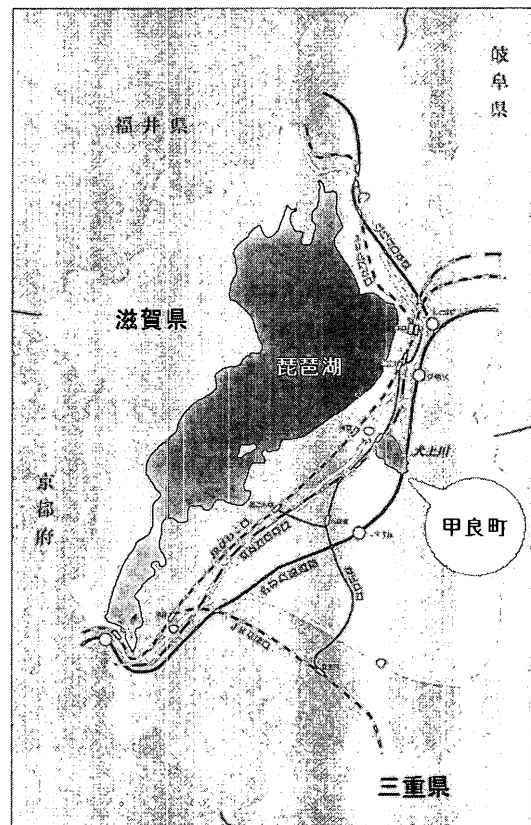
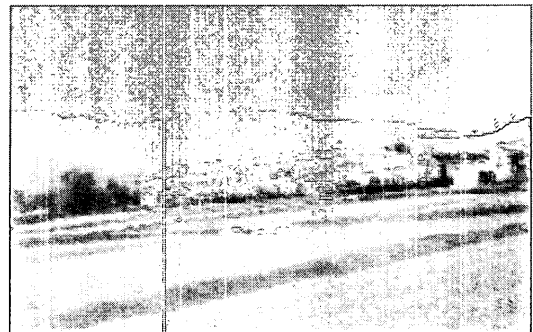
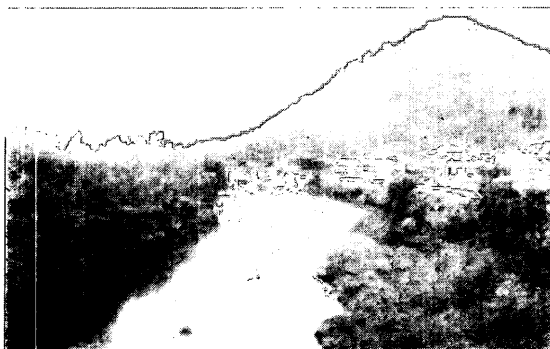
1. 甲良町の地勢
2. 甲良町の特徴——古くから行われてきた治水事業
3. 景観への取り組み
4. 改修された木造校舎
5. 水路に見る、行政と住民とのパートナーシップ
6. 各地区ごとに存在する文化財
7. 総括

### 1. 甲良町の地勢

面積：13.66 km<sup>2</sup>  
人口：8,383人  
主要産業：稲作  
高齢化率：21.7%

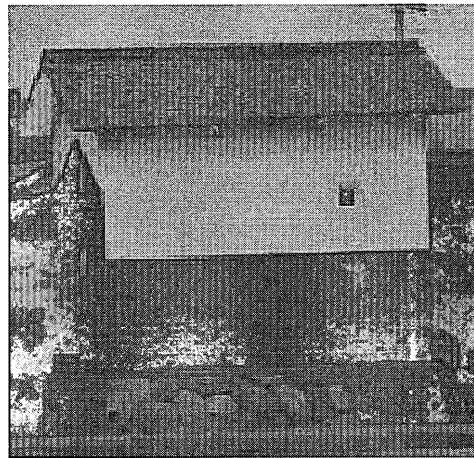
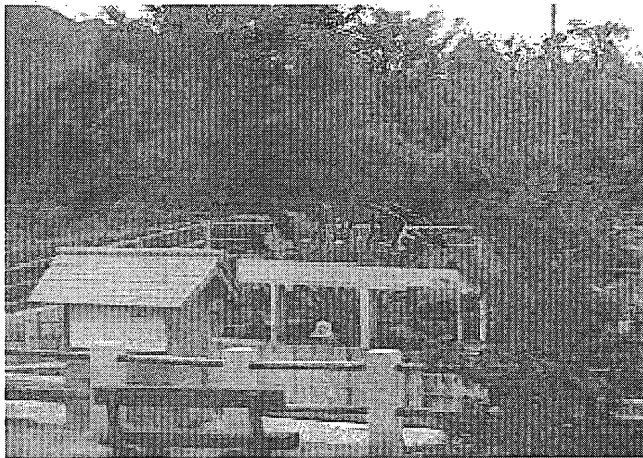
近くには犬上川が流れており、そこを水源として、古く奈良時代より稲作が盛んである。

しかしながら、犬上川の水量は変化しやすく、治水事業が不可欠であった。また、水の権利を巡って各地区が対立し、明治時代には地区間で暴動に発展したこともあったと伝えられている。

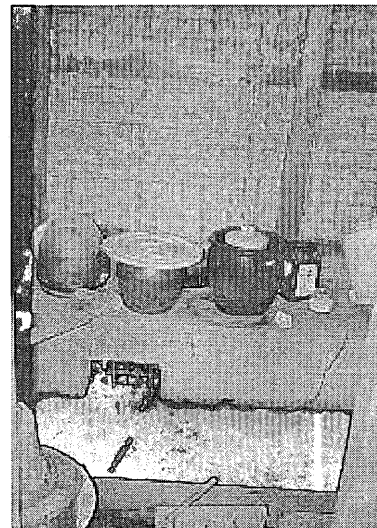


## 2. 甲良町の特徴——古くから行われてきた治水事業

水門や水車を始めとして、水を制御する様々な工夫が古くから行われてきた。中には、水車としての役割を終え、現在では倉となっている例も見られた。(写真右)



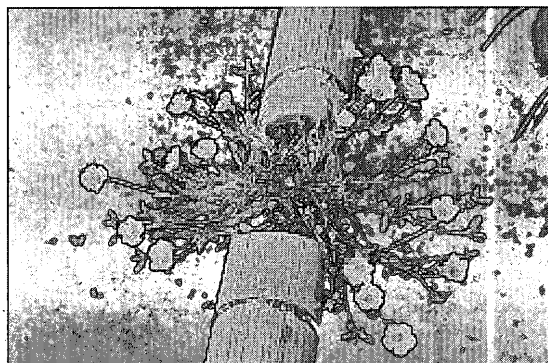
町内を流れる水路は、住民の歴史と文化のシンボルであり、行政の整備事業で改築された。



水路に面した住宅には、写真右の様な洗い場が付属しており、この水路が各家庭の生活にも直結していたことを示している。従って、水路は公共施設であると同時に、住民の私的な生活設備でもあったと言える。

それぞれの家では、自宅前の水路に特色ある飾り付けを施している。

このことは、次頁「景観への取り組み」で詳しく取り上げたい。



### 3. 景観への取り組み

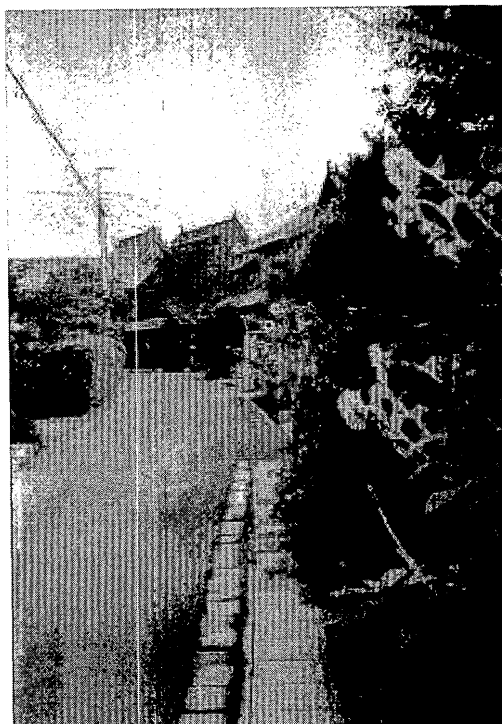
甲良町の景観には、「堀を置かない」「植物を飾る」など、独自のルールがある。水路の飾りつけなどもその一例である。

景観条例もあるらしいが、それは住民の自助努力の後から付いてきた物である。

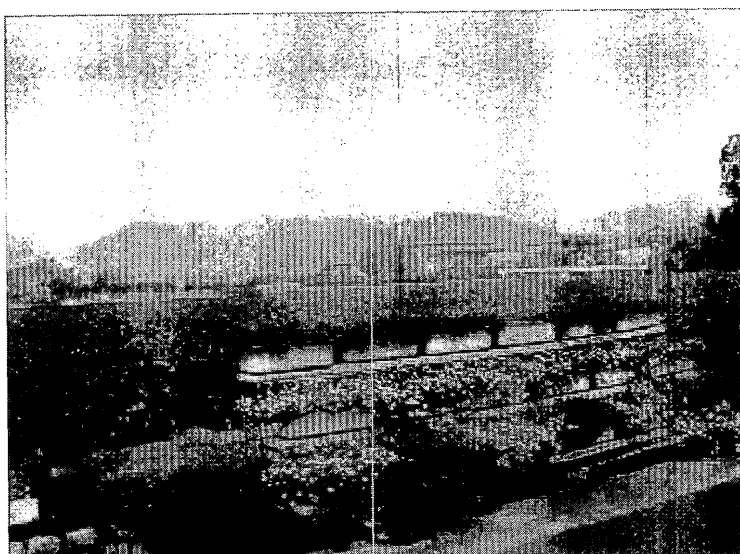
ここには、堀を置かず、植物で飾り立てて、訪れる人々を迎える——というコンセプトがある。

また、町内で問題が起こっても、すぐに行政に頼るのではなく、町会で議論し、公共的な費用を自分達で積み立てて対処する、町内自治の気風がある。

行政は黒子役に徹し、住民と逐次相談して、最適かつ最小限の支援を行っている。



飾りつけには、植物を用いたガーデニングの技法が活かされている。家庭ごと、実に多種多様な飾り付けが施されているのが印象的だった。



中には、排タイヤを用いたオブジェなど、一風変わった物もあった。

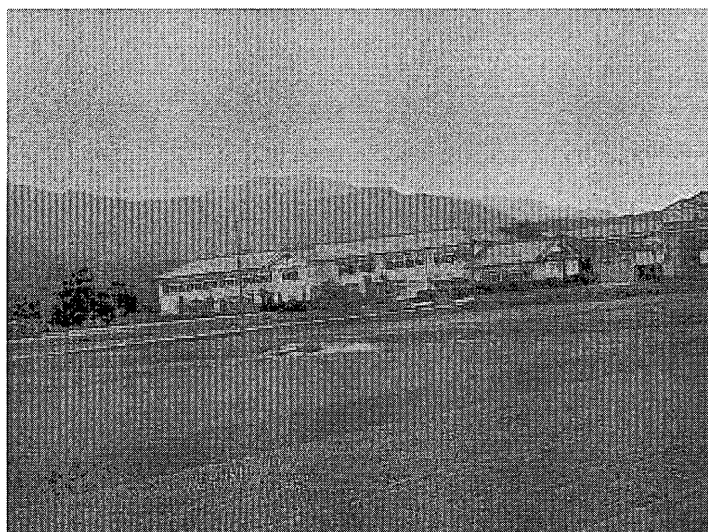


#### 4. 改修された木造校舎

かつての甲良町の小学校校舎は、住民達が自ら檜（ひのき）を持参して建てた・・・という伝統を持つ。

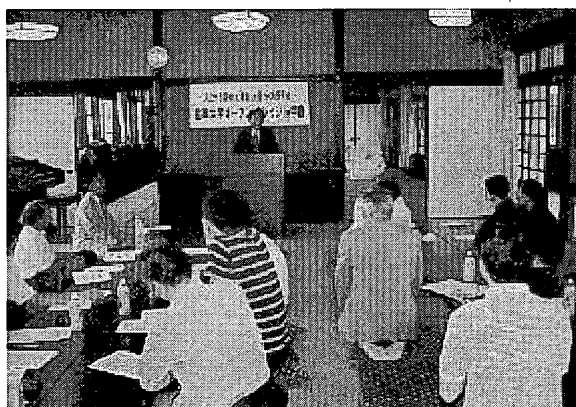
老朽化により立て壊さねばならなくなり、体育館が壊された際、甲良町では大論争が巻き起こった。

住民からの強い要望で、旧校舎は一部を改修されるにとどめられ、新校舎は道の向かいに建てられた。



現在は、1階が町民図書館、2階が研修・宿泊施設として利用されている。今回のオープンカレッジでも、ここが宿泊会場となった。

また、1階の図書館では、かつての教室が、そのまま図書室となっていた。



#### 5. 水路に見る、行政と住民とのパートナーシップ

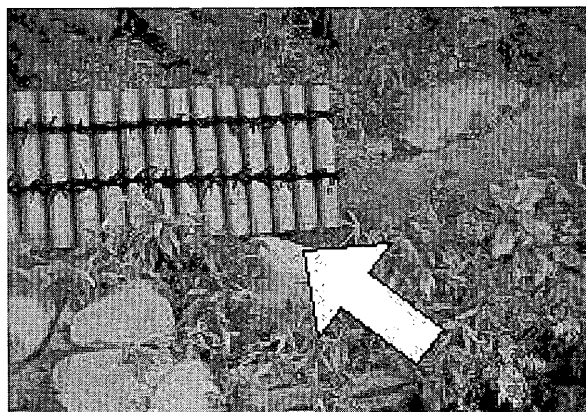
甲良町では、住民と行政がよく議論し、行政が作った水路を住民が飾り付けする・・・という水路の例から伺える様に、民主的かつ連鎖的なパートナーシップが存在する。

その象徴が、水路にある竹であろう。

本物の竹だと湿って腐ってしまう為、町会と行政とで相談し、止むを得ずプラスチック製の竹を用いている。

研修に訪れたボランティア団体等からは批判も出たそうだが、私が考えるに、これは「皆で議論し、できる範囲で実現する」というモットーの顕れであり、むしろ誇るべきことである。

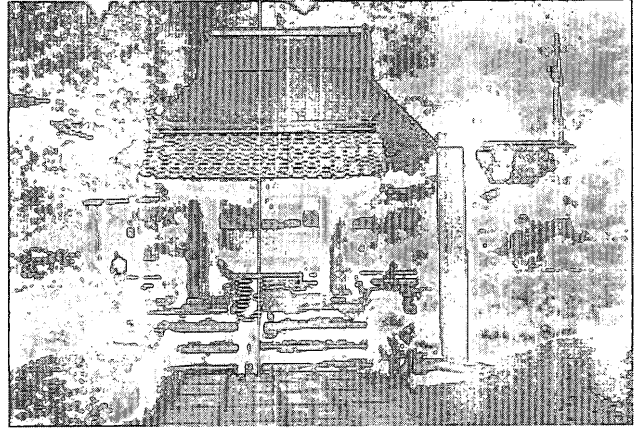
甲良町は、住民と行政のパートナーシップの、1つの理想形ではなかろうか。



## 6. 各地区に存在する文化財

甲良町には様々な文化財がある。

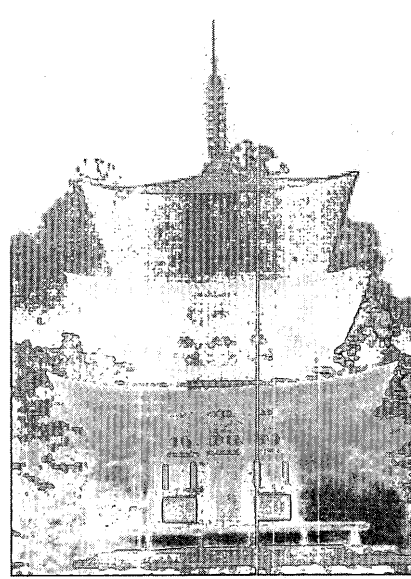
驚くべきことに、各地区には室町～江戸時代までの異なった時代の文化財が区分けされて存在しており、まるで歴史博物館の展示ブースである。



「ばさら大名」こと佐々木道誉の勝楽寺



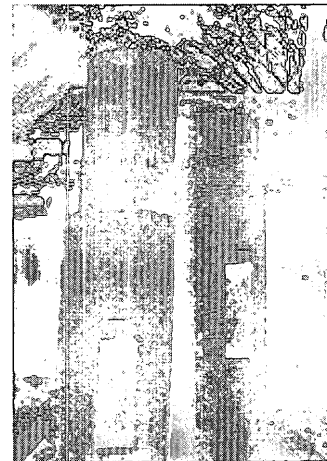
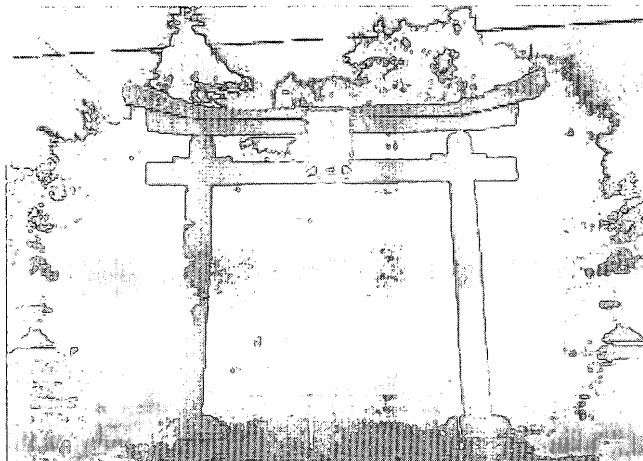
戦国大名・藤堂高虎の石像



西明寺の三重塔（国宝）

この神社では、阪神淡路大震災で鳥居が破損し、いつ崩れるか分からず危険だということで撤去されたのだが、古い鳥居の円柱を廃棄するのは忍びない・・・ということで、モニュメントとして境内に残された(写真右下)。

こうした、文化を大切にする風土も、甲良町の特長の一つである。



## 7. 総括

甲良町の取り組みを直に見たことで、地域におけるまちづくりについて、一つの指針を得ることができた。

実は、甲良町に前後して、松本大学のゼミや就職支援の関係で、富山市の駅前と、六本木ヒルズを訪れる機会があった。これら3地域を比較すると、以下の表の様な方向性の違いが見えてきた。

地 域	主 体	内 容
甲 良 町	地 域 住 民	住民が、自発的に地域社会を維持・増進する。 行政は黒子役となり、その活動をサポートする。
六本木ヒルズ	企業とメディア	住民＝入居者。高所得者に、快適な居住空間を提供する。 商店街を含め、極限まで営利化された地域社会。
富山市の駅前	行 政	都市計画による、画一的な都市デザイン。 住民は不在。がらんとした感じのある、寂しい未来都市。

私見ではあるが、これらが私の考えるまちづくりの3つの方向性である。

いずれの地域も、絶えず変遷を繰り返している為、まちづくりの到達点が分かったなどと断ずるのは早計ではあるが、それでもなお、私はそれぞれの地域の未来を見てしまった様な感じがした。

個人的には、甲良町型のまちづくりがベターではないか・・・と思う。何故ならば、他の2つの事例には、住民としての社会参加が用意されていない様に感じられるからである。

この他にも、同和教育に力を入れている等々、写真では表せない内容もあったが、それについての論述は、他の有識者の方々にお任せしたいと思う。

甲良町の様々な取り組みや思潮を、私の故郷である松本市でどう活用するかを、これから考えていきたいと思う。今回は、地域の将来を考える上で、実に有意義な研修であった。

玉井先生ならびに甲良町役場の方々に、この場をお借りして、深く御礼申し上げます。

